

子どもの発育の新傾向

平井信義

ちかごろの子どもは、昔の子ども——といっても五ヶ年前の子どもよりずっと大きくなっている。幼児期の発育については継続的な統計がないので学童についてみると、明治三十三年の発育を一〇〇とすると身長・体重ともに今の子どもは一〇五〜一〇六の割合で大きくなくてきている。発育がよくなってきたことは一面では喜んでよいことだとも思うが、反面にいろいろな問題を背負っていることを考えなければならぬ。

日本の子どもの体位が向上したことについて、その原因が、子どもに与える栄養条件の好転と、生活環境の改善にあると考えられている。たしかに、じゅうらいの栄養条件があまりにも悪かったから、その点を指摘することは大切なことであるし、生活条件もよくなったことを認めなければならないが、「よさ」の意味は必ずしもはつきりしているわけではない。それは西欧の基準によっているからであって、皮肉を言えば「柄ばかり大きくなったって中身が貧弱ではしようがない」とも言うことができる。それは西欧の子どもも、日本の子どもいじょうに過去五十年間に大きくなり、それに対して、必

ずしも喜ばしいことではないという意見が出されているからである。

体位がよくなっているという事実は、日本だけの現象ではないのである。世界的な傾向である。過去五十年間に、スカンディナヴィア、デンマーク、スエーデン、アメリカなどでは、一〇%も身長が伸びた。ドイツも七・八%、イタリー、スペインなどが日本並みである。ところが、このように文明諸国の子どもたちが大きくなると同時に、欧米では注目すべき現象が生じてきた。

第一にあげなければならないのは、青年期が早くなってきたということである。青年期はいろいろな身体的兆候を目安にするが、体重、身長 of 最大増加年令は過去五十年間に、一、二年前の方にずれてきている。すなわち昔は十三〜十四歳ぐらいにめだつて大きくなる時期があったものが、今はそれが十一〜十二歳になっている。また、女の子で初経の年令は、ドイツなどでは、過去百五十年間に約五歳の短縮がみられ、すなわち十七〜十八歳から十一歳前後になったのである。この調子でいけば、今後百五十年たつて初経は七歳

ではじまり、三百年すれば、幼稚園に入る前の子供に月経がはじまるようなことになるわけである。もちろん、そのように直線的には進まないと思うが、兎に角過去百五十年間に子どもと呼ばれる期間が圧迫され少くなっているということは言える。つまり子どもたちは体が大きくなったのではあるが、青年期がはやくなったのである。男子の射精についても、少し前の統計では一五〜十六才であったのが、体位のもっともよくなったアメリカでは、十三歳半前後ではじまっている。男女共に非常に早い時期に、子どもを生む能力ができていたのである。

また病気の型をみても同様である。今までは、十六〜十七歳に病気にかかる率の山があったリュウマチ・舞踏病などが、今までより早い時期にかかるようになったといわれている。大きくはなつたけれども、今まで子どもであった時代に、青年期の問題がふりかかってくるのである。早くから子どもを生む能力ができることは、不幸な子どもたちをつくる可能性がある。現に若すぎる母親が、真剣に子供を育てる気持がなく子どもを生んでいることをみてもわかる。その数は年々多くなり、私生児を作る大きな原因となり、乳児院、養護施設はそれらの子供で繁生している。又、ティーンエイジャーの問題も、戦争の影響ばかりでなく、戦争のなかった国でも起きているという事は、この青年期がはやくきていることと密接な関係があるのである。身体の成熟が早くなっても、心理的な準備が出来ていなければ、そこに問題が起るのは当然であろう。現に、子

どもの犯罪が多くなりその年齢が低くなっている。

もう一つの問題は、体重の増加に比して身長が増加が目立つことである。一般に都会では身長が高く、それに比し胸囲や体重が小さい「ひよろ長型」が多いが、田舎には身長が少いわりに体重、胸囲の大きい「ずんぐり型」が多い。このようなことから言えば、過去五十年間に「都会型」がふえてきている。これは都市化の現象の一つとも見える。この都会型は背が長く、ある体型の分類によれば、「植物神経失調型」とみられる。そういう体型の子どもにノイローゼが多いから、子どものノイローゼが多くなったと考えられ、現にノイローゼに罹る年令も早くなつてきているし、自殺年令も早くなつてきているのである。結局、子どもたちが大きくなつた問題、青年期が早くなつてきた問題、都会型が多くなつてきた問題が、それぞれ密接な関係があるとみなければならぬ。

どうして欧米においても過去五十年間に子どもたちが大きくなつてきたのであろうか。日本でいわれているように栄養がよくなったことを主張している学者がある。すなわち五十年前の栄養状態と、現在の栄養状態とは現在の子どもの方が動物性蛋白質や無機物質がゆたかにあたえられるようになってきたことから子どもたちの体重が増したことを説明する。ところが欧米の、とくに子どもたちが急に大きくなった国々においては、過去五十年間に、それらの栄養素がそんなに増してはいない。日本においては、農村と都会をくらべると、動物性蛋白質、鉍物質の取り方には差があるが、ヨーロッパ

バでは都会と農村の差がほとんどないのに、都会の子供の方が体位がよいことは日本と変りはない。しかも、都会では「ひよろ長型」いなかでは「ずんぐり型」が多いのである。即ち、栄養の問題より、何か都会的な要素が原因ではないか、と現在の学者たちの間で論争の的になっている。すなわち、都会に多い自動車の騒音、イルミネーション、ラウドスピーカー、テレビなど、こうした刺激が、子どもの植物神経を上げきして、それが更に内分泌系を刺激し、子どもに変化をあたえるのではないか。近代文明の悪い結果によって、体位が向上すると共に青年期がはやくなってきたのではないか。これらは特にドイツで問題になり関心がもたれている。

したがって、私たちには、体位がよくなるが適当な時期に青年期になり、問題を起すようなことなく、適当な時期に結婚をして真剣に子どもを養育してくれる方がよいというように逆な考え方をすることも、あながちおかしいことではない。少くとも子どもを大きくすることのみが、我々の保育・養育の目標ではないことは言える。

一方、子どものからだが大きければ、その子が丈夫であるかどうかは問題である。子どもたちの中で、やせて、小柄で、弱々しい感じのする子どもは親からも、先生からも心配されている。何とか見劣りのしない子にしようと、朝から晩まで気をつけている親がある。朝食、おやつ、晩は晩でおっかげごっこで子どもにたせせようと。大きくしたい、それによって親としての安定感もちたい、というので夢中である。じゅうらいは、そういう子どもは「から

だのよくない子ども」だと思われていた。そしてそのことが母親の心配の種でもあり、幼稚園、小学校によっては身長の高い、体重の少ない子どもを、入園、入学試験の際に条件のわるい子どもの範ちゅうにいれてきた処もある。私はよく、幼稚園や保育所の先生がたから「やせて弱々しい子供をどのように導いたらよいか」と質問される。しかし、やせた子どもが弱いとはいえない。むしろやせていて母親が心配するような子どもは、病氣などに対する抵抗力が強いといえる。このような子どもは、はしかや風邪がはやって熱を出しても比較的軽くてすむ。やせているが非常に活動的な子どもがある。

こんなに活動しなければもつとふとれるのではないか、と思われるほど休まずに非常に活躍する美点がある。一面このような子どもは、豊かな感受性をもっている場合が多い。ふとった子どもの中で、いわゆるみずぶとりといわれる子どもは、病氣にかかるとしばしば重病になったり、急に死の転機にみまわれることは臨床医家からもしばしば指摘されてきたことである。いま、やせている子どもをひいき目にみて述べてみたが、要するに、最近の数年間の研究からみれば、子どもが子どもをたゞ大きくする、太らせるという問題は、色々の角度から反省しなければならぬのである。

ところでやせっぽちで、ひよろひよろした子どもたちは、いまあげたような利点をもっているけれども、その反面欠点もかなり備えている。たとえば、精神的原因によって腹痛をうったえたりする。これを「臍痙痛」という。あるいは幼稚園にくる前に「早朝嘔吐」

をおこす。これも、精神的な不安から起すのである。学校、幼稚園の生活に不安のある場合である。だから日曜日や休日には絶対に吐かない。

では一体、どうしてこのようになるのであろうか。それは、集団生活の中で何か重荷になることがあると、それを予測して神経を使うからである。たとえば集団の中で、自分の気に合わない子どもがいる。しかも自分より力の強い子どもがいる場合、その幼稚園での生活でまごつかなければならぬと予測して不安となり、それが身体症状となって現れるのである。これは仮病ではない。成人にもしばしば起るものである。たとえば「何かの会で順番に感想や意見を述べていただきたい」などと言われると、なれない人はその途端に胸がどきどきし、皆に笑われないようにどのように話そうかと心配する。それで前の人の話などはもう耳にきこえず、心臓の鼓動ははやくなり、中には顔色が青ざめてしまう人もいる。汗かきの人はハシカチを出してふく、泌尿器系に影響して、手洗に二、三回いく人もあるし、中には子どもと同じように腹痛をおこす人もある。私たちのからだには植物神経及びホルモンが全身を支配していて、器管や行動体系を左右しているのです。心の現象はからだに移る。このような症状は、もちろん丸く、ふとっている子どもにもあるけれども、どうしてもその多くは、やせている型の子どもの方が呈しやす。また、知能検査にしても、中には何か問題を云われると返事ができず、頭が混乱してしまふ子どもがいる。学童であれば、試験の

前の晩までよく勉強してきたのに、試験場にくるとぼーっとして、問題になかなかとりつけない。

このようなことを考えてみれば、子どもによって、保育の方法をかえなければならぬことに気付くであろう。すなわち、新しい状態にすぐ適応できる子どもと、なかなか適応できない子どもとはかなり体質的なことによっても影響されるということである。植物神経が過敏な子どもに対しては、いきなり鍛錬主義を用いてはいけません。ますます症状をひどくしてしまふ。このような子どもは、一步一步、場を踏んではならずという漸進主義で養育・保育することが必要である。じゅうらいは一本調子に、子どもの養育・保育ということが言われたが、子どもによって保育の方法をかえる必要がある。同時に扱にくい子供を好ましくない子どもとすぐに言っはならない。私たちは子どもの見かたを変えていかなければならない。よい点と、悪い点とはしばしば表裏をなしている。それぞれの特質を認めていかなければならないのである。

いったい、正常な人間があるだろうか。自分自身を正常と思ひ込んでいてよいだろうか。健康そうにみえていても「お前は全く健康上異常がないか」と問い詰められたとき、自信をもって答えられる人はほとんど少いだらう。乱・近視はすでに眼科的疾患であり、白髪はすなわち、毛の異常である。また、朝あわててカミソリで傷をつけると、外科的疾患があることになる。あるいは、すっかり解剖してみれば、すでに何か異常をもっている人が多いにちがいない。

最近は人間ドックによって、かなり精密な検査ができるが、精密に検査するほど、疾患が多くみつけれられるのである。精神状態でも同様である。わずかな欠点を探すようにすれば、どの人間でも病人や異常者になってしまう。どこまでの範囲を健康ということにするか、どこまでの広さで、人間の性質を考えていくかが大きな課題になるのである。

よい子の概念をせまくとればとるほど、問題児はふえてくる。相談所の数がふえればふえるほど、問題児もまたふえるという皮肉な現象である。したがって心にしても、またからだにしても、どこまでを正常とみていくかの考えを子供の教育、養育に当っているものがはつきりまとめていかないと、子どもたちを傷つけ、親たちを心配させることがでてくるだろう。

やせていてもよい点をもっている子どももいるし、ふとっぴいでもよい点をもっている子どもがいる。人間であるかぎり、何から何までまったくよいということはどうも考えられないことである。ある母親は、うちの子どもをもっとすばしい人間にしたいと考える。しかし、その子どもがおそくても物事が完全にできるといふならば、それは長所である。すばしくくて、完全にできる人間はおそらく少いだらう。子どもに望む理想的な性質の考え方にしても、それに対する欲ばりはなほだしの場合には、子どもはその重荷にたえかねて、かえって問題を起すことになる。

古いソクラテスの時代から、人間の心とからだは違った存在のよ

うに言われてきた。しかし、現実の人間をみるとときには、心とからだは裏表になっており、不即不離というべきである。

心に起った問題は、しばしばからだと結びつく。からだで起った問題は、しばしば心と結びつく。それ故、私たちは、いつも心とからだの両面から子どもを理解することが必要である。それと同時に、子どもの心を通じてからだに影響をあたえるところの新しい都会的なもの、または近代文明の所産が、子どもたちの心とからだに對してプラスになっているか、マイナスになっているかをよく考えてみなければならぬ。

私たちは往々にして、外国からはいつてきたもの、何か新しいものを「よいもの」と思って、すぐに子どもたちにあたえようとする。新しい保育教材にしても、指導の方法にしても、建築にしても、私たちは、それが子どもたちにプラスになっているか、マイナスになっているかについて総の角度から検討しなければならぬ。例えばテレビなども、それを備えられなければ子どもがかわいそうなのかどうか、いろいろな角度から検討しなければならぬ。同時に子どもたちの将来の問題に関しても、発育、発達に関する人間観をしつかりと考えて、しかるのちに保育しなければならぬ。

以上いろいろなことについて述べたけれども、真に子どもを幸福をねがう人々たちによるディスカッションの材料にしていただけば幸である。